楠正行公　ゆかりの地

南北朝時代の正平3(1348)年1月5日、高師直が率いる北朝方の六万騎ともいわれる大軍と、楠 正行が率いる南朝方のわずか三千騎が戦いをくり広げ、数時間の激戦ののち、正行・正時と一族は自害して戦いは幕を下ろしました。このとき、正行23歳、弟 正時21歳、いとこの和田賢秀は22歳でした。

「太平記」には、足利尊氏軍の高師直と楠木正成の息子である楠 正行が戦った「四條畷の戦い」が描かれています。

四條畷市は、その戦いの主戦場であったとされる地で、戦死した楠 正行たちゆかりの史跡が街中でみられます。

楠 正行イラスト

「櫻井の別れ」を描いた父子像

≪四條畷神社≫

楠 正行を主神とし、弟 の正時など24名の烈士が祀られています。明治23年、小楠公御墓所から1㎞東の飯盛山麓に創建されました。本殿の西隣には、正行の母久子を祀る御妣神社が鎮座しています。

←≪四條畷楠木正行墓のくす≫

（府指定天然記念物）

四條畷の戦いから80年ほどたったころに、正行の死を悼んだ人々が2本のクスノキを植えました。その後クスノキは、正行埋葬時の小さな墓石を包み込み1本の木となり、樹齢約600年もの年月を重ねてきました。

四条畷市　南北朝

≪伝楠木正行墓≫→

（府指定史跡）【小楠公御墓所】

台座も含めた高さ7.5mの巨大な石碑は、龍間山（大東市）の石を用いて2年以上の歳月をかけて制作され、明治11年に完成しました。石碑の文字は大久保利通によるものです。

←≪伝和田賢秀墓≫

（府指定史跡）

楠 正行とともに四條畷の戦いで戦死した賢秀は、亡くなるまで敵に噛みついて離れなかったと伝わることから、地元では「歯神さん」として崇められています。

※「楠木」・「楠」姓の表記について

父の正成については、「楠木」と表記することが定着していますが、正行については、「楠木」・「楠」と表記が混在しています。

『太平記』では「楠正行」と表記されていることや、正行を祀る小楠公御墓所の石碑には、大久保利通の揮毫により「贈従三位楠正行朝臣之墓」と刻まれていることから、本市では「楠」と表記しています。